



水の文化 共生の 希望



- 陣内秀信「地方都市と水の共生」
- 沖 大幹「沖大幹のスペイン・サラゴサ万博レポート」
- 水の文化楽習実践取材「水と持続可能な開発」
- 鳥越皓之「アジアと日本の水文化」
- 藤本 淳「ITで実現される理想社会」
- 今岡孝之「進化する工場の水処理思想」
- 池上 彰「今、必要な報道とは」
- 須知裕曠「水都大阪を盛り上げる水陸両用バス」
- 山折哲雄「共生とは何か」
- 大熊 孝「技術にも自治がある」
- 古賀邦雄 水の文化書誌「河川思想の変遷」

水の文化 November 2008 No. **30**

水の文化
2008
30



ミツカン水の文化センター

表紙上：山梨県北杜市長坂町にある三分一湧水。農業用水を均等に分配させるため、湧出口の分水柵に三角石柱を置き、三方向に流水を分岐させたもの。共生には、豊かな自然の恵みを分かち合ってきた人たちの智慧と蓄積を継承していく手立てが必要だ。

表紙下と裏表紙上：2003年に開催された京都子ども水フォーラム。Tシャツをウコンで染める体験プログラムで冷えきってしまった子供たち。身体をストーブで暖めるうちに、自然と掛け声とともに手拍子が始まった。さまざまな国の言語やリズムがいつの間にか一つになり、Tシャツ完成の祝いと慰労を歌い上げる。協働あってこそ共生として、忘れられない一コマだ。

裏表紙下左：2005年の温水で早明浦（さめうら）ダムは湖底を見せた。あらわになった湖底は、自然と共生すること以上に人と人が利害を超えてともに歩む難しさを静かに物語っている。

裏表紙下中：豪雪地帯の大変さは、地元に重くのしかかるが、雪は春まで水を蓄えてくれてもいる。温暖化によって雪が雨になれば、降水量は同じでも貯水とは呼べなくなっていく。

裏表紙下右：スペイン・アルメリアの点滴灌漑を、この目で初めて見て感じたのは、つくづく豊かな水に囲まれて生きてきたのだ、ということ。こうしたかけ離れた感性も、必要なときに必要な量の水が手に入れられなくなったら、取り入れざるを得なくなるのだろうか。

